

日 生 研 究

第 9 卷 昭 和 38 年 1 月 第 1 号



1



2

寄生性気管支拡張症

宮崎大学農学部獣医学科出題・第2回獣医病理学研修会標本 No. 26, No. 27 A, B

牛においては肝蛭 (*Fasciola* sp.) が肺に異所寄生して気管支拡張症を起すことがある。このことに関しては本邦で古く田熊氏の報告 (中央獣医学誌, 1926) があるが、著者は先年神戸と畜場で2万5千余頭の牛について調査した結果、全と殺牛の1.97%に本症病変を検出した。胸腔經由或は血管經由で肺に侵入した肝蛭は先ず肺組織内を遊走するが、(図1)はその所見を示す。即ち、虫体の組織破壊に伴なつて起る出血・ヘモジデリン沈着・好酸球の浸潤集簇等が見られるが、好酸球集簇巢のうち、やや経時性のものは周囲に Fibroblasten の増殖を起し、いわゆる好酸球性膿瘍を形成する。虫体からやや離れた肺胞内には粘液の貯留が著るしく、且つ、その内に好酸球・大単核円形細胞等を含有する。小さい気管支枝のうち病変の比較的激しいものでは、粘膜上皮は一部剥脱し、管腔内に多量の変性好酸球等を充満、管壁には好酸球・リンパ球・プラズマ細胞等の浸潤を呈し、且つ、リンパ滲胞の腫大を認める。これを要するに肺胞及び小気管支枝においてはカタル性炎の像が明かである。

次に、肺組織内を遊走する肝蛭が偶々気管支腔内に侵

入すると、虫体による慢性刺激によつて管腔の拡張を招来する。この際、原発の拡張病巣 (第1次気管支拡張部と命名。その大きさは拳大以上に達するものあり) はその末梢にある小さい気管支枝に病変を波及して、多くの第2次気管支拡張部を形成する。この場合、拡張した気管支枝の管壁には著明な結合織の増殖が起り、それが更に小葉間質に波及して間質結合織の顕著な増厚を来す。病的気管支枝の外囲に位置する肺胞は拡張気管支枝のため圧扁され、また、増厚した間質結合織の圧迫を受けて著しく狭小となり無気肺の状態に陥る (2図)。なお、これら結合織増生部には細胞浸潤の著明なところがある。狭小型の肺胞と共に、1) 図で見たようなカタル性炎像の著しい小気管支枝や肺胞も認められるが、これらにおいてはその腔内容物の一部が既に器質化を起し始めている。勿論、狭小と内容物充填の双方の病像を併有する肺胞も少なくない。

一般に病変部とその外周に位置する健常部とは、小葉間質を境として明瞭な区分を示すのが常である。